

松田諦晶と古賀春江—松田資料をもとに

森山秀子

はじめに

石橋美術館は、松田諦晶が残した下記の資料を一括所蔵・保管している¹⁾。

- I スケッチブック80冊
- II 日記36冊
- III 手帳24冊
- IV 写真帖29冊
- V 書簡151通
- VI 来目会関連資料11件
- VII ノート9件
- VIII 新聞切り抜き40件
- IX 絵葉書
- X その他(メモ、草稿など)29件

この松田資料は、今までに刊行された古賀春江に関する著作や展覧会カタログ²⁾でも紹介されてきたものであるが、ここで改めてこの資料のなかから、古賀春江に関する資料を抜き出し、両者の交友に目を向けながら紹介を試みたい。松田の資料は、古賀の事績を跡づけるうえでも貴重な資料である。

松田諦晶(本名実, 1886-1961)は、久留米市の生まれ。森三美の画塾で学んだことはあるが、ほとんど独学で洋画を学んだ。太平洋画会展には明治44(1911)年の第9回展から、二科展には大正3(1914)年の第1回展から入選していたが、大正10(1921)年を最後に中央の展覧会から遠ざかってしまう。彼に対する坂本繁二郎の期待も大きく、坂本から自作の批評をしてもらっていた時期もある³⁾。大正2(1913)年、洋画団体「来目会」⁴⁾の立ち上げに関わり、さらに昭和6(1931)年には久留米洋画研究所を開設、久留米の地で多くの後進を育てた。

古賀春江(1895-1933)は、はじめ松田に洋画を学び、その後、太平洋画会研究所、日本水彩画会研究所に学んだ。まるで松田と入れ替わるかのように、大正11(1922)年の第9回二科展で二科賞を受賞、以後二科会を主な活動の場とした。

松田と古賀の出会いは、明治43(1910)年頃、古賀が松田に絵を習い始めたのが最初だったようである⁵⁾。古賀15歳、松田は24歳だった。それ以降、二人の交友は、昭和8(1933)年の古賀没年まで続

くことになる。

1 写生旅行

二人はともに写生に出かけることもあった。以下の松田にあてた古賀の葉書は、古賀が松田と写生に行くことを楽しみにしていたこと、彼が技術面だけでなく精神面でも画家として成長していく上で、松田を慕っていたことを裏付けるものである。

一緒にゑかきに行けたらと思つてゐる 駄目な願だらうか 私の中では今百万の兵が関の声をあげてゐるやうだ この秋はうんと描きたい ミッチリと落ち付いてスケッチでなくミッチリとやりたいと思つてゐる 一緒にゑかきに行けたらどんなに嬉しからうと思つてゐる。(書簡1-13) 1919年9月18日消印松田宛古賀春江書簡) (fig.1)

二人の写生旅行については、残された資料や作品から明らかにできるものだけでも以下の5件をあげることができる。()内は各事項の典拠となる松田資料である。

- ①1914年7月 柳川(スケッチブック26, 日記4)
古賀は、1912(明治45)年の夏、画家を志して上



fig.1 古賀より松田にあてた葉書
1919年9月18日消印

京するが、その後もたびたび帰郷する機会があった。1914(大正3)年の帰郷の折には、松田とともに水郷・柳川(柳河)へ出かけた(柳川は詩人・北原白秋の生誕地でもある)。幸運なことに、その時のスケッチブックが両者ともに残っている(fig.2-7)。さらに松田の〈スケッチブック26〉には、以下のような松田探宛書簡の写しがあり、柳川での二人の行動をたどることができる。

最早其日の午後には古賀君と二人紅や白い花咲く蓮池の葉渡る風に吹かれ乍Mさんの話やカチューシャの歌等を唄って…(中略)明日もまた行きます 古賀君が沖の端を描いてみますから

私も描き度いと思つてみますから…七月十八日 一四年

私が柳河へ来て最早五日になる 古賀君はかなり大きい絵を二枚描いた そして、もう柳河が

厭に成つたと云つて今朝久留米に帰つた…(中略)私は一寸さびしくなりました エナジーが足りないのか私はまだ絵筆を握る気にならない かわりに未、柳河が厭にもなりません…二一・七・一九一四

また、同様の文面の写しは同じく松田の〈日記4〉にもある。以上の書簡写しから、二人が柳川に行ったのは、1914年7月17日であること、そして古賀はすでに作品を2枚仕上げ、7月21日には久留米に戻ったことがわかる。2005年度新収蔵作品《柳川風景》(fig.8)は、その時の一点と推測できる。一方、松田は、古賀が久留米に帰った後、やっと制作欲が高まり、《柳河町裏》(fig.9)という30号の油絵を制作、8月16日に久留米に戻った。彼はその作品を第1回二科展に出品、みごと入選を果たすことになる。

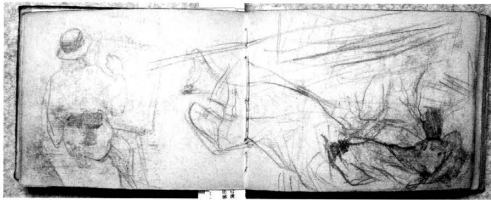


fig.2 松田スケッチブック 1914年

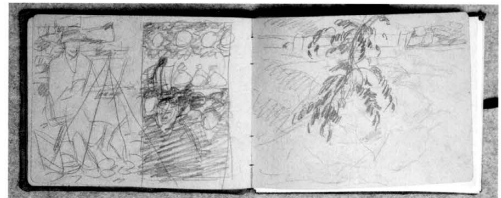


fig.5 古賀スケッチブック 1914年



fig.3 松田スケッチブック 1914年



fig.6 古賀スケッチブック 1914年



fig.4 松田スケッチブック 1914年

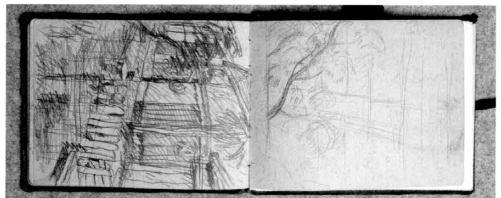


fig.7 古賀スケッチブック 1914年

②1920年6-8月 ともに代々幡の竹藪を描く(日記6)

1919(大正8)年9月、松田は上京した。彼の東京での生活は、途中何度かの帰郷をはさみ、1923年5月まで断続的に続く⁹⁾。この頃の松田は本格的な画業への道を模索していたのであろうか。松田と古賀の交友もまたこの間が最も濃密であったことが推測できる。松田日記の中に古賀に関する記述を数えると、1920年の〈日記6〉で52件、1921年の〈日記7〉で24件にもなる。二人はこの間頻繁に往き来し、手紙をやりとりした。

1920(大正9)年6月20日、松田上京、さっそく翌21日、古賀が松田を訪問したこと、東京での二人の往来は、8月12日に松田が東京を発つまで続くこと、この間、二人で代々幡(渋谷区)の竹藪を描きに行ったことなどが〈日記6〉に記録されている。

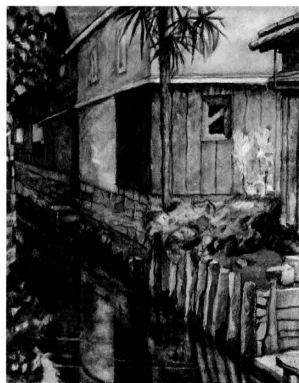


fig.8 古賀春江《柳川風景》
水彩・紙 1914年

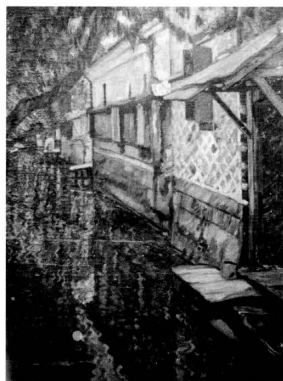


fig.9 松田諦晶《柳河町裏》
油彩・カンヴァス 1914年

春江君来る 十時頃なり それより代々幡村付近へ出かけ春江君は藪を十号にかく 自分も明日より描くことに定む 二時帰宅 中食 六時迄春江君ゐる 雨ふり出す渋谷駅迄春江さんをおくり…(6月23日)

午後春江君来る 共に代々幡村へ出かく 二人共藪を描きはじむ 春江君は水彩十二号大に描く 自分は二十号人物形に初じむ…六時頃春江君帰る(6月24日)

といった具合である。古賀の現存する数点の竹藪を描いた水彩画は、この頃の制作になるものと思われる。

以上2件について、注目すべきことは、同じ場所で作成するにしても、古賀は水彩で、松田は油



fig.10 松田スケッチブック 1922年

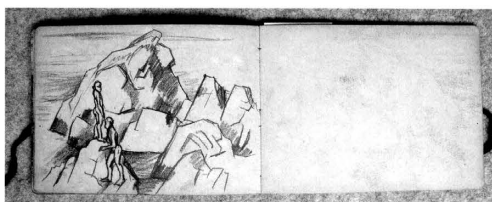


fig.11 松田スケッチブック 1922年

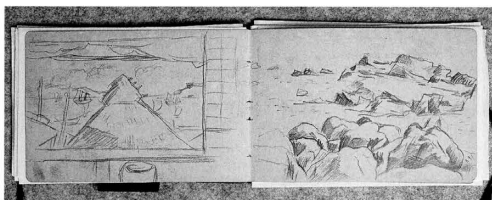


fig.12 古賀スケッチブック 1922年

彩で制作した点である。

③1922年7月末-8月初旬 筑前鐘崎(スケッチブック49)

1922(大正11)年7月末から翌月初旬まで、松田と古賀は、筑前鐘崎(福岡県宗像市鐘崎)に出かけた。この時のスケッチブックがともに残っており、しかもその中には、同じ時同じ場所からスケッチしたと思われるものがある(fig.10-12)。古賀は旅館の2階から見たスケッチをもとにはほぼ同構図の《二階より》(fig.13)を油彩で制作し、以前から制作にかかっていた《埋葬》とともに第9回二科展に出品、二科賞を受賞することになる。一方、松田は、松の木の間に見える藁葺き屋根の家を描いた(fig.14)。

④1923年8月 筑前奈多海岸(来目会日誌)

〈来目会日誌〉には、会の活動とともに会員の動向も記録されている。古賀春江に関する事績を拾ってみると、たとえば以下のような記録が見ら

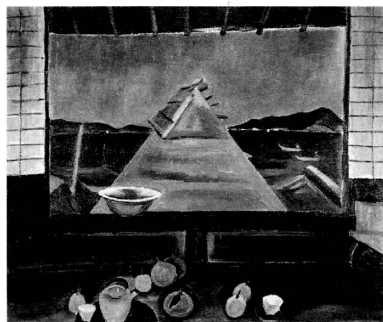


fig.13 古賀春江《二階より》
油彩・カンヴァス 1922年



fig.14 松田諦晶《鐘ヶ岬風景(藁家と松)》
油彩・カンヴァス 1922年

れる。

大正拾壹年九月

古賀春江、二科に「埋葬」「二階から」の二点入選する。

中川紀元「埋葬」をむきになって賞める。

大正拾壹年十月九日

(展覧会追記)…第三日目(八日)に古賀春江の帰省も嬉しかった。

大正拾貳年八月一日-八日

一日より八日間粕屋郡奈多へ写生に赴く

来会者 松田、小松、古賀春夫妻、執行、牛島、吉武、三島、野田、高橋、

八日午後奈多より帰来

この記録により、1923(大正12)年8月1日から8日まで、松田と古賀らは、筑前奈多海岸(福岡市東区奈多)へ写生に出かけたことがわかる。松田については、この時のスケッチブック(スケッチブック57)が残るとともに、この時の制作になると思われる作品も数点残っているが、古賀については、この時の成果物と特定できるものはない。

⑤1924年2月 久留米市御井町にて写生(写真帖大正 No.6)

松田は晩年、自作のアルバムを作り、タイトルや制作日など各作品についてのメモも残した。それによって、ほとんどの松田作品は、制作時期と場所が特定できるのである。

1924(大正13)年、松田と古賀は久留米市御井町で一緒に写生する機会があったようである。というのも、府中市美術館所蔵の古賀の《風景》



fig.15 古賀春江《風景》油彩・カンヴァス
1924年 府中市美術館蔵

(fig.15)と松田の写真帖に残る作品(fig.16)は、同じ場所を描いたものであることが明らかだからである。松田の写真帖に残るその作品は、松田自身の筆跡で「御井町風景」というタイトルが付けられ、1924年2月の日付となっている。しかも同じページには、「写生する古賀春江」という作品の写真(fig.17)が貼られており、その場に古賀がいたことはまちがいない。

1922年以降、古賀は本格的に油彩画を制作し始める。松田と古賀の作風は、この頃(1922-24年頃)最も相似しているため、後年、松田の作品に古賀の署名が入られることもあった。

2 古賀の死の前後

松田と古賀の交友は、昭和に入ってから変化したように見える。松田の日記が、1922(大正11)年から1930(昭和5)年までを欠いているため、書簡も松田のもとに残されたものがすべてとは言えないことが予想されるため、断言はさげなければならないが、二人の手紙のやりとりも減り、ましてやともに写生に出かけることはなくなったようで

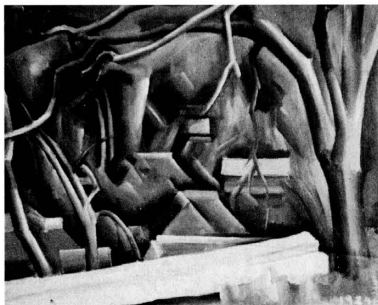


fig.16 松田諦晶《御井町風景》油彩
1924年〈写真帖大正No.6〉より



fig.17 松田諦晶《写生スル古賀春江》油彩
1924年〈写真帖大正No.6〉より

ある。古賀から松田に宛てた書簡は、1926(大正15)年6月までは、年に数通の頻度であったのが、その後は1927年3月31日消印の葉書(書簡1-41)が残っているだけである。古賀自身の帰省の機会が減ったこと、それぞれが多忙になったこと、絵画に関する考え方や取り組み方が違ってきたことに起因すると思われる。上記昭和に入ってから古賀の葉書とは、来目会展に出品する作品を松田宛に送るので、枠に張って出品してくれ、という依頼の葉書である。二人の関係は、師弟関係から友人関係へと明らかに変わっていた。

松田は、「古賀春江の面影」⁹⁾という回想文で以下のように記している。

昭和六年から二ヶ年間全く彼と会えなかった私は昭和八年七月初め突然彼の細君より長文の音信に接した。(暇乞いに行くと云って春江が帰郷の途につきました。着きましたら入院療養するよう説得願います。前後畧)。これと同時に愛犬に曳かれ乍ら彼が私の眼前に夢遊病者さながらの姿で忽然と現れたのである。—焦点のぼやけた瞳差、物怖する如く右顧左顧し乍ら語る支離滅裂で意味をなさぬ言葉一。私は惘然自史唯暗涙に咽ぶのみであった…。

二人の交友は、少なくとも2年間絶たれていたことが、上記回想よりわかる。その間、古賀の肉体も精神も急速に蝕まれていたのである。

1933(昭和8)年7月5日、古賀は帰郷した。帰省中はまるで昔を思い出したかのように、たびたび松田のもとを訪れたことが、〈日記10〉よりわかる。以下該当部分を抜粋する。

午前八時古賀春江君来る今朝四時帰米せしとの事 午前十時停車場へ犬(連れて来たブル愛犬)を取りに行くとして帰る。兄さん病気通知により帰つたとの事…古賀春江君来り一時頃迄雑談(7月5日)

午前八時半古賀春江君坂本氏訪問の途中一寸立寄る(7月8日)

午前六時十三分古賀春江上京す 停車場迄見送り六時半帰宅(7月14日)

上記〈日記10〉では、古賀の10日間の久留米滞在中に、二人が会ったという記録を6件見つけることができる。また、松田のもとには、彼の回想文にあるような7月10日付の好江夫人から松田に宛てた書簡(書簡1-46)が残されている。しかも、その書簡には、古賀から好江夫人に宛てた手紙(お金を無心する内容のもの)も同封されている。もはやその筆跡はひどく乱れ、判読しにくい箇所もある。そのような身内の恥をさらしてもかまわないほど、好江夫人は松田のことを信頼し、またそれほど古賀の病的な行動を持ってあましていたことが推測できよう。

8月7日消印の好江夫人から松田に宛てた書簡(書簡1-47)では、古賀の帰京後の病状などが報告されている。その書簡によると、古賀は8月1日に帝大病院島蘭内科に入院、駄々をこねてはみなを手こずらせていることなどが報告されている。「他に話していただきませぬやうと申してもいつか分かる事でせうが恥多い日々をやるせなく感じてゐます」と記されている。その後松田は古賀危篤、死亡の報を東京の友人より受けとることになる。その記録もまた〈日記10〉に見ることができる。

今日午後東京佐野敏一より入院中の古賀春江危篤の通知来る(9月9日)

午後四時古賀春江死亡通知報報来る(9月10日)

好江夫人は、古賀の死後も松田を頼りとし、その交友は、好江夫人が亡くなる1949(昭和24)年ま

で続く。

3 古賀没後

古賀没後、松田の日記に残る古賀関連の記録を以下にあげる。

1933(昭和8)年10月28日 古賀春江葬儀(松田は弔辞を読む):〈日記10〉

1934(昭和9)年12月1日-3日 第23回来日会展にて古賀春江遺作展開催(好江夫人奔走、松田も尽力):〈日記11〉

同12月3日 古賀《文化は人間を妨害する》を久留米市役所に、50号の作品を明善校にそれぞれ寄付:〈日記11〉

同12月10日 好江夫人、古賀の水彩画持参、日吉校及び男子高等学校へ寄付する作品を選定:〈日記11〉

《文化は人間を妨害する》(fig.18)は、現在所在不明、明善校、日吉校、男子高等学校など古賀ゆかりの学校へ寄付された作品については現時点では残念ながらどのような作品であったか不明である。

1944(昭和19)年5月15日 善福寺境内に古賀春江供養塔建立(東京在住の高田力蔵とともに奔走):〈日記18〉〈日記19〉〈日記20〉

この古賀春江供養塔(fig.19)建立に関しては、1942年12月にその動きが始まったことが松田の日



fig.18 古賀春江《文化は人間を妨害する》
油彩 1933年



fig.19 古賀春江供養塔 久留米市善福寺境内

記よりわかる。完成までの高田力蔵とのやりとりが日記に記されている。

4 松田旧蔵の古賀作品

松田は、古賀春江の作品を4点所蔵していたことが日記からわかる。それらの作品を晩年手放す際、作品の受け渡しに関する記録が〈日記36〉に記されているのである。その作品とは、《裸婦》(F50号)、《梅》(版画)、《房州波太風景》(水彩ワットマン半切)、《竹藪》(水彩)である。

《裸婦》(fig.20)は、1927(昭和2)年4月の第11回来目会展出品作、上記の同年3月31日消印の葉書(書簡1-41)で、古賀が松田に作品を送るから枠に張り額に入れて出品してほしいと頼んだ作品である。《梅》(fig.21)は、1924(大正13)年の第11回日本水彩画展出品作にもとづき木版画にしたもので、古賀の百箇日の返礼として配られた。〈日記10〉に「寺町古賀より便手紙を持ち来る帰途立寄り呉れとの事 帰途寄る故春江君百カ日の返礼に春江君水彩画木版一枚を貰ひ…」とあるものである(1933年12月19日)。《竹藪》(fig.22)は、1920(大正9)年6月、代々幡の藪をとともに描いた頃の思い出の作である。

おわりに

松田と古賀に関する資料として、以上の他にも、古賀が《サーカスの景》を制作する際、参考にし

たと思われる絵葉書を忘れてはならない。「独逸ハーゲンバック動物園・世界最大の猛獣大サーカス図実景」と書かれたその絵葉書は10枚残り、うち6枚に絵の具が付着している。古賀の絶筆《サーカスの景》は、それらの絵葉書のなかの動物を組み合わせて制作されたものである⁸⁾。その絵葉書がどういう経緯で松田のもとに残されたのか、死を目の前にした古賀が松田に渡したもののなのか、あるいは、もともと松田が所有していたものを古賀が借りたのか、不明である。いずれにせよ、これらの絵葉書は、《サーカスの景》の制作過程を明らかにしてくれるだけでなく、松田と古賀の交友の深さをうかがわせる大変貴重な資料である。

残された松田資料は、松田と古賀という二人の画家の交友記録として読むことも可能である。古賀ははじめ、松田のことを兄のように慕い、絵以外の私生活についても松田にいろいろな相談をもちかけていた。松田もまた古賀のことを常に気に留めていた。そのような関係は、生涯変わらなかったものの、古賀が中央画壇で認められるようになると、二人の関係は微妙に変わってきたこと、師弟関係から友人関係へと変わっていったこともわかる。その資料はまた、古賀の没後は、松田をはじめ好江夫人や高田力蔵ら故人をよく知る人たちによる、古賀顕彰の記録でもある。



fig.20 古賀春江《裸婦》
油彩・カンヴァス 1927年

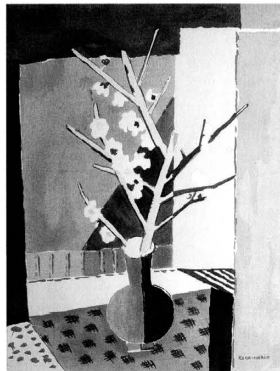


fig.21 古賀春江《梅》木版画



fig.22 古賀春江《竹やぶ》水彩・紙 1920年

註：

1) 詳細は、『生誕百年記念松田諦晶展』カタログ(1985年、石橋美術館)巻末の「松田諦晶資料」を参照。
この報告で紹介する松田資料を以下に列記する。

I スケッチブック

〈スケッチブック26〉1914年5月15日～10月16日

〈スケッチブック49〉1922年7月～11月

〈スケッチブック57〉1923年4月～9月頃

II 日記

〈日記4〉1913年1月1日～1914年12月29日

〈日記6〉1920年

〈日記7〉1921年

〈日記10〉1933年

〈日記11〉1934年

〈日記18〉1942年

〈日記19〉1943年

〈日記20〉1944年

〈日記36〉1959年8月1日～1960年, 1961年

IV 写真帖

〈写真帖大正 No.6〉1923年, 1924年

V 書簡

〈書簡1-13〉1919年9月18日消印古賀春江より松田宛書簡(葉書)

〈書簡1-23〉1923年5月3日付古賀春江より松田宛書簡(葉書)

〈書簡1-41〉1927年3月31日消印古賀春江より松田宛書簡(葉書)

〈書簡1-46〉1933年7月10日付古賀好江より松田宛書簡(封書)

〈書簡1-47〉1933年8月7日消印古賀好江より松田宛書簡(封書)

VI 来目会関連資料

〈来目会日誌〉1922-28年

2) 『古賀春江回顧展』(展覧会カタログ), 福岡県文化会館, 1975(昭和50)年11月

古川智次編『近代の美術 第36号 古賀春江』至文堂, 1976(昭和51)年9月1日

『写実と空想』中央公論美術出版, 1984(昭和59)年10月

『古賀春江—前衛画家の歩み』(展覧会カタログ), 石橋美術館/ブリヂストン美術館, 1986(昭和61)年4月

『古賀春江 創作の原点—作品と資料でさぐる』(展覧会カタログ), ブリヂストン美術館/石橋美術館, 2001(平成13)年4月

なお, 松田資料の書簡151件のうち, 古賀関連のもの

は49件あり, 古賀自身の書簡は, 上記『写実と空想』ですべて紹介されている。

3) 坂本繁二郎と松田諦晶との関係については, 「松田諦晶と坂本繁二郎—松田資料をもとに」(『館報』52号)を参照。

4) 1913(大正2)年, 武田弥一郎, 松本豊太(松濤), 東原経治, 大野米次郎, 古川潤二, 松田の6名が協議し発足した久留米の洋画団体。1922(大正11)年, 「来目洋画会」から「来目会」と改称。1914年の第1回展から1953(昭和28)年の第39回展まで開催, その後久留米市総合美術展に継承される。

5) 『古賀春江回顧展』(展覧会カタログ)の「年譜」による。

6) 松田日記は, 1922(大正11)年から1930(昭和5)年までの分がなく, その間の彼に関するくわしい消息がつかめない。1923年5月3日付, 古賀から松田に宛てた葉書(書簡1-23)では, 住所が東京市外中渋谷となっている。

7) 『櫺』5号(1958年8月)所収

8) くわしくは, 『近代の美術 第36号 古賀春江』(至文堂, 1976年), 『古賀春江 創作の原点—作品と資料でさぐる』(展覧会カタログ, ブリヂストン美術館/石橋美術館, 2001年)などを参照。